

明治村 だより

1999 Autumn



秋号
Vol.17



目次

リング精紡機	鈴木一義	2
明治村文庫のご案内		7
日曜講座 明治建築種明かし	西尾雅敏	8
明治村の仕事 4 建物サービス		10
館蔵資料紹介(六) ガラス絵	大北八千代	11
写真コンテスト入賞作品発表		12
明治の物売り紙上紹介		13
秋の明治村		14

表紙写真リング精紡機

「明治村だより」
第十八号発行のお知らせ
発行時期 平成十一年十二月(予定)
申込方法 「明治村だより」第十八号ご希望の旨
及びご住所・お名前を明記の上、送料
一四〇円分の切手とともに封書にてお
申し込み下さい。

平成十一年九月十六日発行
「明治村だより」第十七号(平成十一年秋)
発行 博物館明治村
愛知県大山市内山一番地
電話(〇五六)六七〇二一四 千四八四一〇〇〇〇
ホームページ <http://www.meitetsu-museum.jp/>
製作 大日本印刷株式会社

明治村文庫のご案内

本年十月より、村内二ヶ所の建物に収めていた明治村の蔵書を公開致します。蔵書の内容については、「明治村だより」十三～十五号で詳述しましたので、ここでは省略させていただきます。

一、「内閣文庫」

近代史・建築史・文学など一〇六五〇冊

「内閣文庫」は周知の通り、江戸時代徳川幕府の所蔵本を引き継いで明治政府が収集した書籍と政府の公文書を皇居内に収蔵していた建物です。建物をご覧になる方の中には、この政府の旧蔵書と一緒に寄贈されているのかという素朴な疑問をお持ちの方もたまに見受けられるようです。

こうした由緒ある建物を使用するので些か誤解を招きそうですが、今回この建物に収めた図書は、当館が永年にわたり収集した蔵書の一部と、初代明治村村長徳川夢声氏の旧蔵書および初代博物館館長谷口吉郎、二代館長関野克の

旧蔵書から構成されています。

内容は、主に日本の近代史に関するもの、特に当館移築建造物に関連する分野を中心に揃えており、そのほか建築史・美術史・文学などです。

特に徳川夢声氏の旧蔵書は、比較的発行年が古く、大半は文学書ですが、芸能関係のものも多くみられます。

明治のこういう分野を知りたいというご質問にもなるべくお答え出来るようレファレンスも順次行っていききたいと考えております。

二、「名古屋衛成病院」内

「成瀬文庫」「日赤文庫」計一九二〇冊

「成瀬文庫」は、犬山城主であった成瀬正勝氏の旧蔵書で近代文学を中心としたコレクションです。「日赤文庫」は、日本赤十字社旧蔵の明治時代からの文書及び図書です。いずれもやや専門的なので、研究者や学生の閲覧が主になるうかと思われれます。

三、公開方法等

公開にあたっては、両方とも一応許可制という形で平日のみ十時から三時まで開館致します。



閲覧ご希望の方は、あらかじめ予約（文書・電話）して頂きたいと思っております。

普通の図書館より設備等不十分な点はありますが、この点は何とぞご了解下さい。博物館の教育普及活動の一環であり、明治文化研究の為の一大センターとして広く活用していただきたいと願っております。

尚、明治村の秋催事に「内閣文庫」内展示室で、初代村長徳川夢声氏の旧蔵書を展覧しますので、あわせてご覧下さい。

皆様のご来館をお待ちしております。

詳しくは、博物館明治村（図書担当）までお問い合わせ下さい。

「明治建築種明かし」

西尾 雅敏 (当館 建造物担当部長)

〈九月のテーマ 西園寺公望別邸坐漁荘、十月のテーマ 帝国ホテル中央玄関〉

九月と十月のテーマ「坐漁荘」と「帝国ホテル」には一寸した共通点を感じます。どちらも小さな小山のような外観なのです。緩やかな屋根がいくつも折り重なるようにあって、その隙間毎に大きい窓や小さな窓が開けられています。実際、二つの建物の屋根を点検するのに梯子などは必要とせず、窓や屋上の出入口から屋根伝いに軽々と廻ることが出来ます。まさに小山を巡るように。そして子供が海岸の岩場を飛び回る時のような楽しさがあります。建物の中の雰囲気にも共通点があります。自然で穏やかに開放的で飽きないのです。先ず坐漁荘から見えていきましょう。(写真1)

昔、静岡県興津にあって、西園寺公望公の別邸であった当時であれば玄関先への立入りすら許されない建物でしたが、今は建物案内のある時間であれば誰でも、玄関と言わず、座敷、二階から、奥のお風呂や台所まで、或は政治的な密談に使われたであろうサンルームにも遊ぶことが出来ます。屋内を巡って感じられることは、

余り贅沢な造作ではないが、ゆったりとした間取りであるということ。敷地周囲の塀などで十分にガードされていたというこの西園寺家の特殊事情はありますが、住まいそのものは大変開放的に作られています。このような開放性は、この坐漁荘の向かいに江戸向島から移築された幸田露伴の蝸牛庵にも見られるように昔の日本家屋には多く見られ、その意味では、日本の町中が安全であった頃の標本にもなりそうな日本家屋です。

室内が穏やかに感じられるのには理由があります。壁、柱、建具、欄間飾りなど、どれを取っても、身近にある自然の材料を使っています。「紙と竹と土で出来ている。」というのは、日本家屋の脆弱さを表現した言い方ですが、自然の生の材料だからこそ、日本人の肌馴染む穏やかな空気が生まれています。建物自体が「森に育った日本人」と同様自然の一部なのです。

人間が安全に生活できる区域を厳格に区切り取る西洋建築の考えとは異なり、自然の風景の中

しても同じ。洋服で言えば、リバーシブルなのです。過去何千年の歴史の中で、人間が生活した色々な環境の中で、このように内外同じ肌合いを持つ住環境は何かと考えると、それは、洞窟とか、古代の土の家とかが浮かびます。アメリカ原住民、プエブロ・インディアンなどの家などは良く似ています。日本の家が森の民の住まいであるならば、帝国ホテルは植物の少ない荒野に作られた赤茶色の土の家のようなです。それもそのはずで、設計者フランク・ロイド・ライトは中南米マヤの神殿をモチーフにこの建物を描いたとも言われています。煉瓦の色と楕目、大谷石の肌合いは、同じヨーロッパ系の人の設計にもかかわらず、西洋的な冷たい厳密さよりも未開地の素朴さを感じさせてくれます。

色、肌合いもさりながら、幾何学模様の彫刻が、あらゆる壁の上下、床板の先端など建物を水平に巡り、見る者に安定感を与えてくれます。難しい形の彫刻ではありません。三角定規二つと物差しがあれば、設計が可能な形です。しかし、その凹凸の具合は絶妙といふべき物で、陰影の表情はなんとも言えず楽しいものです。

世界的な名建築などと大袈裟に構えなくとも、この建物の良さを知りたければ、子供のようにならぬ直気分で眺め、建物に入れば良いのです。最初に書いたように、いくつもの屋根が重なるようで、その姿は自然の山並みを見るようでもあり、富士山を愛でるような感覚でもあります。玄関を入ると、もっと楽しくなります。大階段を昇ると、中央の大きな吹き抜きから全

で人々がとどまる場所だけなるべく雨風が来ないようにするのが日本の住まいでした。二階座敷の畳に寝転べば、縁側から寄せ来る風に、さも芝生に遊ぶような清々しさを覚えます。板張りのサンルームで藤椅子に腰掛ければ、海辺の小屋で水平線を行き来する船を眺める心地がします。数十年前、西園寺公望が実際にしたであろうように。

見飽きない姿、使い飽きない空間が良い建物の大切な条件です。明治村に移築されている数多くの建造物の中でも、帝国ホテルと坐漁荘はその筆頭に挙げられます。

帝国ホテル(写真2)は言うまでもなく今世紀屈指の名建築と言われる建物で、建物の、外から見ても、中に居ても、殆どの視界が私たちの目には独創的だいて且つ馴染み良く映りまわっている材料の種類はさほど多くはありません。櫛目の入った煉瓦、大谷石、テラコッタ、銅板、金箔が挟み込まれた細かいステンドグラス、これらで殆どです。目を見張るような高価な材料は見当たりません。普通の洋風建物に使われている材料が、色々な工夫の末に、独特の柔らかな表情を持った建築材料に生まれ変わっているのです。

しかも、建物の内側も外側も、その使われている材料に差はありません。内外をひっくり返

ての部屋が見渡せます。その周辺に色々な装置が用意されています。左右ラウンジへの螺旋階段、泉をイメージした壁泉、洞窟巡りのような起伏が人々の意表を突いて現れ、一歩進むごとに視界が変わるのです。今は明治村に中央玄関の部分だけしか復原されていませんが、その中央玄関だけでも三メートル四方もの広さであって、その広さにもかかわらず、明るい室内です。その訳は広い窓です。外から眺めると、張り出した屋根や壁や柱が目立ち閉鎖的に感ずるのですが、中からの眺めは人々の憩う場所ごとに外部との壁が少なく、明るく開放的なのです。坐漁荘に見る日本の開放感と同一の風景が帝国ホテルにはあります。

人間的なスケールの様々な装置を幾重にも積み重ね、並べ、微妙な段差で繋ぎ止めて、大きな空間に纏め上げられている帝国ホテルや坐漁荘。それは、洋の東西を問わず、建築が真に人間のために造られるものだということを物語っているようです。

最後に、小学生の目に映った帝国ホテルを紹介いたします。(写真3)大人ならずと見過ごしてしまおう大小の大谷石に刻まれた色々な形が丹念に描かれています。レンガの色、市松模様のステンドグラスの色も細かいパッチワークの様画かれています。建物を見る子供の姿も驚きを良く表して、左下の子供など必死に真上を見上げています。奈良時代の信貴山縁起絵巻「飛倉の巻」の坊主のように。



写真1



写真2

写真3

今回は村内で展示建造物を案内する職場（建物サービス）をご紹介します。
この建物サービスというのは、入場者に建物についてより詳しく説明して、建物の良さを十分に理解して頂くことを目的として、平成九年八月に創設された仕事で現在十五名の女性によって構成されています。
明治村を五つの区域に分け、それぞれのエリアに二、三人を配置し、一日の内で時間を決めて建物内外の掃除などをしながら案内をしています。
そのうちの笹木久子さんと本村勝子さんに話を聞きました。

「この仕事は公募によるものですが、応募の動機は何ですか。」
笹木 やはり明治村というネームヴァリュに惹かれました。建物の案内というのは一体何をするのか全く未知の世界なので好奇心があったということもあります。



本村 やはり明治村のイメージが良かったせいもありますが、自分自身としては建物にまず興味がありましたし、人と接するのが好きなのです。
「実際に案内してみてもいかがでしたか。」
笹木 お客様に話を聞いてもらうということは非常に難しいことだと実感しました。
本村 毎日いろいろな人と出会えるのが楽しいと感じました。

「具体的にどのように案内するのですか。」
笹木 建物を訪れたお客様すべてにまず挨拶しませんが、一言三言話すと詳しい説明を聞きたい方が少ないので、説明もポイントを抑えて話そうとしています。

本村 まずお客様に挨拶してから始めますが、何気ない一言でどのような事に興味を持っていらっしゃるのかを瞬時に判断します。時には一般的な世間話も必

「案内して良かったと感じたことはありますか。」
笹木 十数人のグループの方に説明して最後拍手された時はうれしかったですね。

「今後もっと工夫したほうが良いと思われることはありますか。」
笹木 仕事にプロ意識を持つことが結局は自分の為であり、明治村の為にもなることだと思います。また案内する場所が固定化されているので、もっと他の建物や関連した事柄も勉強して広い視野を持ちたいと考えています。
本村 案内の仕事をより向上させるとともに明治村のすべての建物を説明出来るようにしたいと思っています。

お客様に接する最前線の仕事として皆熱心に取り組んでいます。彼女たちの案内を聞くために二度三度ご来村頂けるよう今後とも努力してほしいと願っています。

館蔵資料紹介【六】 ガラス絵

日本人とガラス

現在の私たちが何気なく目しているガラス、それが工芸品である窓に嵌められているものであれ、ごくあたりまえのものとして見えています。



ガラスの工芸品は、正倉院御物に遺されているように、古代からわが国に伝えられ、ぎやまん・びいどろと呼ばれていました。浮世絵でポツペンを吹いている美人画は良く知られていますが、高価で珍奇なものとしてではやられました。
明治時代、各地に建てられた洋風建築にはそれまでの日本建築と異なり、ガラス窓が使われるようになりました。とりわけ色ガラスの窓をもつ小学校などは地元の人からギヤマン学校と呼ばれて親しまれたそうです。元来日本人は外来の文化に強い興味をもってきましたが、ガラスなどもその最たるものではないでしょうか。

ガラス絵について

ガラス絵というものをご存知でしょうか。一昔前よく床屋の待合いや銭湯の脱衣所に掛けられていた美人画や風景画もその一種です。
ガラス絵のはじまりは、十四世紀初頭のヨーロッパで、透明な板ガラス製法が発達し、なおかつ油絵具や彩画技法の開発によりおもにキリスト教の民衆強化のための宗教画として描かれ、教会や民家を飾りました。

ガラス絵の製法はガラスの裏面から油絵具や、膠で顔料を溶いた絵具で描くものです。そのため普通の絵画とは描く順序を違えなくてはなりません。まず輪郭や服の襞、顔もしくは対象物の色塗、最後に背景の塗りつぶしという手順です。
十八世紀、東インド会社設立により東西貿易が盛んになるとさまざまな文化と共にガラス絵もアジアに伝わりました。それまでアジアはどちらかといえば水彩絵具による表現が主流でしたが、ここで油絵具に出会うこととなりました。

中国では宣教師によりガラス絵が伝えられ、十八世紀半ばにはヨーロッパに多くの絵が輸出されました。わが国にガラス絵が伝わったのは、江戸時代、鎖国中の唯一の窓口であった長崎の出島でした。長崎では、異国情緒溢れる人物画や風景画が地元の人達により描かれ、長崎系ガラス絵と呼ばれました。程なく江戸にも伝わり、浮世絵師が美人の首飾や草花の絵、風景画などを描き、江戸系ガラス絵と呼ばれました。こうした流れは日本における洋風画の魁といわれています。
司馬江漢が書いた「江漢西遊日記」によると天明八年、長崎に立寄った際、オランダ商館でガラス絵を見たという記録、

「十月十一日―二階オランダ坐しきを見物す。イギリス細工のビイドロ額、欄間下掛けすを並べ、下には椅子を並べ、」また自分自身も各地を回り板ガラスの製法とガラス絵の



技法を伝授している記録、「十月三十日―玉屋というビイドロ細工の処へ行き、板ビイドロの伝授す。」などという記述を見る事が出来ます。しかし、ガラス絵はほとんど無名の絵師たちによって描かれ、特に署名もなく今日に伝わっています。

明治のガラス絵

ガラス絵は、板ガラスの輸入量が増大した明治時代に最も盛んとなります。初期のものはまだ気泡が多く、歪みの多いガラス板に描かれていました。描かれたモチーフは浮世絵の系統で、美人の首飾や草花の絵、縁起物が多く、芝居・役者絵なども好んで描かれました。
ガラス絵はそのまま額に入れて掛けたりしましたが、一閑張り（生地の上に紙を貼り、漆を塗ったもの）で、江戸時代、飛来一閑が創製したことからは呼ばれる。茶道具などにその応用品が多い。の小箱の蓋に嵌め込んだりして身近に置きました。この小箱は琴爪入れや化粧品入れなどに使われたようで、流行に敏感でハイカラ趣味の女性にはうってつけの小物でした。明治時代の女性風俗が一旦洋風化に飛躍したわけではなく、こうした家庭生活のこまごまとした物などから徐々に洋風へと移行したとみられます。

これらのものは本来消耗品ですから、状態良く遺されているものは少なくなりましたが、明治の女性の生活を偲ぶことのできる好資料だと思われま

参考文献

- 「日本の美術 第三十七号ガラス」至文堂 昭和四十四年
- 料治熊太「明治の骨董」光芸出版 昭和五十年
- 加藤孝次「明治大正のガラス」光芸出版 昭和五十一年
- 芳賀徹、太田理恵子「江漢西遊日記」平凡社 昭和六十一年
- 小野忠重「ガラス絵と泥絵」河出書房新社 平成二年

大北八千代（当館学芸員）

秋の明治村

明治のものうり

紙上紹介

商売の形態として町なか及び街角で商品を売り歩く「物売り」は、わが国では八世紀の頃より行われてきた。古くは「触れ売り」「振り売り」とも言った。

江戸時代には粗悪な商品売買や押売りを禁止する意味で許可制にしたり鑑札を出したりして種々その扱いには変遷があった。

明治以降は社会情勢の変化に伴い、経済的流通機構の整備や交通事情の発達、また衛生的見地から、売り買い双方にとって実に便利であった「物売り」というかたちはだんだん影を潜めていったが、庶民にとっては依然根強い日常生活の必需品であったことは想像に難くない。

季節毎に生鮮品から動植物、衣類にいたるまであらゆる商品を扱って庶民生活に一番身近な風俗として発達した「物売り」を紹介することによって、明治の風物詩の一端を再現するものである。

今回、秋の催事（次頁参照）で、いろいろな「ものうり」が当時の服装と独特の売り声で登場し、村内各所を売り歩く。

土・日・祝日は、一堂にものうりが集合し、それぞれを紹介するショータイムも行う。

《ものうりスポット》

レンガ通り 時間／10；30～15；00

《登場するものうり》

いなりずし売り・よかよか飴売り・駅弁売り・パン売り・酒売り・あわ餅売り・傘売り・辻占売り・吹玉売り・蓄音機屋・号外配り・広目屋・京都のとっかえ屋・ストリートオルガン弾き



吹玉売り「風俗画報」明治42年
吹玉とはしゃぼん玉のことで、江戸時代から夏の風物詩のひとつ。以前は箱を紐で首に掛け傘をさしていたが、明治時代になると桶を持つようになった。



蓄音機屋「風俗画報」明治33年
明治時代まだ一般には普及していなかった蓄音機が縁日の屋台に登場した。その音の妙なるを特有の口上で説き、幾つものゴム管をつけて一人一銭位でレコードを聞かせた。



明治村賞 一瞬の陽光 筆山芳蔵



大賞 マイ・ホリデー 荒田玲子



大賞 明治の学校 大花征也



大賞 陸蒸気を望む 吉岡哲幸

明治村写真コンテスト 入賞作品発表

明治村写真コンテストは、入村者の方に明治村についてより親しみを持っていただくため企画したもので、明治村の四季折々の風景や催事などさまざまな場面を撮影して応募していただいています。

今回の平成十年度写真コンテストは、多数の方から応募が寄せられました。去る六月末日に締切、応募総数七百二十五点に達しました。七月二十一日に厳正な審査のもと、明治村賞一点、大賞二点、特選五点、入賞十一点、佳作十五点が決定しました。

現在は通年募集のため、すべての季節をあらゆる角度から撮影しています。また入村者のいきいきとした表情を巧みに捉えた作品も多く、

これらの入賞作品を中心に、明治村のカレンダーも製作しています。

特選作品 (敬称略)

夏目漱石宅へ(功刀賢、若葉香る明治(西浦義尚、雨の日のファミリー(横山吉郎)、雪の帝国ホテル(稲垣量、散策(甲村連夫、

入賞作品 (敬称略)

春を行く(矢花久慶、秋彩(太田英作、訪問者(小栗守)、窓辺(山中健次、再会(中村トキ子)、朝もやたつ金沢監獄(渡辺学、北里研究所本館を望む(阿部洋士)、春の聖サビエル天主堂(寺澤英治)、「光彩の館」(丸山賢道、雪景色呉服座(羽原宗男)

佳作作品 (敬称略)

初秋の明治村(平野博巳)、ハッピーウエディング(中

沢博、雪の日に(暮石成二)、五月晴れ(鈴木安子)、懐古(大嶋武夫、車寄から入鹿池を望む(鈴木豊成)、偲ぶ路(大橋妙子)、花の香りに包まれて(中村治朗、秋麗(あきうらら)(村木誠二)、それ、もう一回(稲垣日奈子)、明治村の印象(伊藤貴和子)、宵の明治村(薄暮)(木村芳子、つつじ咲く明治村(倉内幸博、明治の佇まい(玉置豊二)、明治の飾電燈(前島鉄二)

☆平成十一年度明治村写真コンテストで作品を募集しています。募集期間 平成十一年七月～平成十二年六月 詳しくは博物館明治村「写真コンテスト」係までお問い合わせ下さい。

明治ものうり大百科

9月11日(土) ~ 11月28日(日)

ようこそ昔の日本へ

展示

「明治〈商売 繁盛〉」三重県庁舎1階
当時のものうりが実際に使っていた道具や看板、引札など商売に関する資料を展示します。



「明治舶来モノはじめ
~それは居留地からはじまった~」

三重県庁舎
長崎居留地二十五番館
神戸山手西洋人住居(特別公開) 羅宇車

居留地返還百周年を記念して、文明開化の様相を紹介します。



「徳川夢声って
どんな人?」

内閣文庫1階
初代村長 徳川夢声が収集した本を展示します。

神戸名所 「居留地外国クラブ」
林基春画 明治31年

「写真コンテスト入賞作品展」東山梨郡役所2階

四季折々に表情を変える明治村の風景を写した作品を展示します。

「三村信三郎
源氏香版画展」

東山梨郡役所1階
版画家棟方志功の弟子である三村氏の作品を展示します。

「日曜講座 明治建築種明かし」

開催日；9月12日・15日・23日・26日、
10月10日・11日・24日、11月3日・7日

時間；11:30~12:00

明治村に移築された建物にちなんだ話題を実際の建物の中で解説します。

9月のテーマ；西園寺公望別邸「坐漁荘」
~おらかな住まい方~

10月のテーマ；帝国ホテル中央玄関
~20世紀を代表する建物~

11月のテーマ；明治村百選 ~明治村のみどころ~

記念日イベント

ジオラマで見る名鉄電車の歴史 三重県庁舎

10月9日(土)~11月23日(祝・火)

10月14日の「鉄道記念日」にちなみ、名鉄電車の歴史を鉄道模型で紹介します。

SL重連運転

10月9日(土)~11日(祝・月)

鉄道記念日にちなみ、機関車2台を連結して運転します。鉄道マニア必見!

品川燈台特別公開

10月30日(土)~11月3日(祝・水)

11月1日の「燈台の日」にちなみ、内部を公開します。

「1」並び記念あれこれ

平成11年11月11日、「1」が並ぶことを記念して様々なイベントを行ないます。

●三時代の今日の出来事

明治・大正・昭和三時代の出来事をご紹介します。

●スタンプラリー

11にちなんだ建物を探して下さい。正解すると記念品が出ます。

●重要文化財スタンプラリー(11月中)

明治村に現在ある11件の重要文化財のスタンプを集めて下さい。

●姓名に「十一」がつく方は入村無料。(要証明書)

呉服座公演

明治なんでも演芸館

期間中の日・祝日 11時~14時

恒例の落語の他、一般公募による芝居・伝統芸能等の公演。

骨董フリーマーケット

日本赤十字社中央病院病棟前広場、雨天時は第四高等学校武道場無声堂内

開催日；11月7日(日)

●入村特典

9月15日の「敬老の日」は65歳以上の方は、入村無料となります。(要証明書)

※催事の詳細については事前にお問い合わせください。